



ESCAP 雑感

江崎 光 男

ESCAP は、国際連合の地域経済委員会の一つである Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (アジア太平洋経済社会委員会) の略称です。ECAFE (アジア極東経済委員会) の方が通じ易いのですが、1974年、その活動領域に太平洋地域と開発に伴う社会的問題も含めることになり、名称も ESCAP——エスカップと読む——に改められました。事務局(本部)はバンコクにあり、東は日本、西はイラン、北はモンゴル、南は豪州までの地域をカバーしています。私は、1978年11月より1年間、その1部局である開発計画部にて、国際公務員の世界をかいまみる機会を持ちました。「現地通信」としては少々時期遅れになりましたが、既に春たけなわの京都から常夏のバンコクへ想いをはせながら、ESCAP での経験を二、三、思いつくままにつづてみようと思います。

ESCAP に来てまず驚きましたのは、猛烈な車ラッシュに対応して、勤務時間が相当早朝にずれ込んでいることでした。乾期(11—4月)では午前7時30分から午後3時45分まで、雨期(5—10月)になりますと、浸水し易いバンコクの特長事情から、30分短縮の午後3時15分までとなります。朝早い代りに午後早く実務から解放されるわけですが、それに加えて、土、日とも休日の完全週休2日制ですし、しかも、有給休暇(病気休みは限度内で別わく)が月2.5日、年間30日まで正当な権利として認められています。この有給休暇は、ある意味で義務とも考えられ、それを正当にとるよう奨励されていると同時に、未行使分については相応の報酬さえ支払われます。国連職員の多くは、このように恵まれた勤務条件の下で、本業のみならず余暇活動にも十分生きがいを見出しているようです。働き蜂の多い日本社会もいづれこうなるのかと、期待と不安が交錯した次第です。

タイ民衆の目には、高額な俸給と十分な余暇を享受しながら貧しい国の開発問題を論じる ESCAP 職員の世界が、自分とはかけ離れた存在にうつりがちであることは否定できません。タイの新聞の ESCAP に対する論調は必ずしも好意的とはいえないようです。「乞食が ESCAP に行ったら、報告書をどっさり恵んでくれた」という笑い話に代表される批判的記事が毎年のように掲載されるそうです。私がいた時も、否定的色彩の強い特集記

事が、バンコク・ポスト1ページを使って組まれたことがありました。当然のことながら、国連マンは、国際公務員としての自らの仕事に多かれ少なかれ自負心を持っていますが、利害対立する国際社会の下でむなしさを覚える場合も少なくないようです。私が帰国する直前の9月、1980年代の開発戦略に関する報告書が開発計画部で準備され、政府間会議で加盟国の討議に付されました。私も会議の一部始終を傍聴し、ESCAP 事務局のレポートが一言一句加盟国の利益に反しないような形に修正・削除される模様を目のあたりにしました。極端な例をあげますと(あまり本質的ではありませんが)、ベトナム代表が Democratic Kampuchea という用語は妥当でないと発言しますと、ソ連代表がすかさず同意表明をし、さらに中国代表が原文のままを主張するといった具合です。ESCAP は国連事務総長ならびに加盟国に対して責任を負っていますので、ESCAP 事務局は加盟国の意思に沿った仕事をしよう要求されています。国際公務員の世界はまさに官僚の世界であるという感を新たにいたしました。

ESCAP の目的は①加盟諸国のかかえる経済社会開発上の共通の問題を探り出し協力を促進する②加盟諸国間で経済社会問題を討議する場を提供する③加盟各国の要請に基づき技術援助と諮問業務を提供する④情報交換所としての役割を果たす、などの手段で域内加盟国の人々に奉仕することにあります。この目的に関連して、ESCAP では、大小とりまぜ年間数百に達する国際会議(大きなものだけでも100を越える)が開催されています。最近この種の会議の有効性が問題にされ、国際会議を減らすための国際会議が開かれたほどです。会議のたびごとに ESCAP 内外で討議資料が準備されますので、年間膨大な量の報告書が ESCAP から出されることになり、先ほどの乞食の話につながってゆくわけです。ESCAP に対する批判は少なくなく、その存在価値もしばしば問われていますが、利害対立する国際社会の中で対話の場を提供していることだけをとり上げて極めて大きな意義があるといわねばなりません。国際社会のニーズにあった仕事を要求されている国際公務員の世界は、それが学者の世界と多少異質であるにせよ、私にとって大変得難い経験となりました。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)

東北タイのラオス難民キャンプ

三 谷 恭 之

昨年10月以降のカンボジア難民大量流入は、タイにおける難民問題をいよいよ困難なものにした。その惨状は世界に報道され、政府の救援資金援助以外には冷淡であった日本の民間にもようやく救援活動に関心が持たれるようになった。

しかし、タイにおけるラオス難民についてはあまり知られていないのではないか。船によるベトナム難民のようなニュース性もないし、その数や現状はカンボジア難民ほど絶望的でないことは事実だが、1975年以来、今回のカンボジア難民流入

以前にタイに入ったインドシナ難民総数約30万のうち20万人以上がラオス難民であり、昨年10月末現在、タイ国内難民総数約17万のうち14～5万がラオス難民である。難民たちはタイ各地16カ所の難民センターに收容されているが、そのうちウボン、ノンカイおよびローイの3カ所が大きく各3

～4万人を收容、いずれもラオスからの難民である。ただしローイのキャンプにはメオ族が多く、このほか北タイにもヤオ族を主体とするキャンプが5カ所ある。

私はこのうちウボンとローイの難民センターを訪れる機会があった。昨年9月、バンコクでコーネル大学のハフマン教授に会った際、教授が現在ウボンのキャンプで言語調査をしており近々もう1度行くということなので特に同行を許してもらい、バンコクから車で8時間ぶつとばして同キャンプを訪れた。難民センターはベトナム戦争当時の米軍キャンプ跡にあり、ムーン川をはきんだ対岸のワリンには米軍が残した巨大なレーダーがそのまま放置されている。軍キャンプ跡だから道路も整備されており、住民も教育水準の高いラオス人が主体で衛生状態もよく、難民キャンプ中最良のところという。竹造りの家が無数に立ち並び、道路の両側には食物屋、雑貨屋から仕立て屋、パーマ屋まであり、若者たちが終日行きかう巨大な



ローイ難民センターで食糧の配給を待つ子供たち

田舎町である。売り家の看板もあった。難民受け入れ国のインタビューや食糧配給日の混雑も何かのお祭りのように見える。いろいろな意味で安心した私は調査の打ち合わせを済ませて、ハフマン教授と別れた。メコン川沿いに車を走らせ、以前は対岸の銃声で今夜は何人殺されたか当てっこしたとか、毎日上流から死体が流れてきて黄色いメコン川が血で赤くなったとかいった話を途中で聞きながら、次はローイのキャンプを訪れた。森を切り開いたようなところで、メオ族が多いせいも

あって巨大な山地民集落といった感じである。楽器を吹き鳴らして踊る男に人々が喝采を贈る。女たちが竹筒で水汲みをしている。救援活動をしているアメリカ人に結構楽しそうじゃないかという

と、仮設病院と食糧配給所を見せてくれた。カンボジア難民の報道写真に見るような母子が寝ている。片足を失った男が喘いでいる。助かる見込みはないという。以前はもっと多かった。これでもよくなった方だという。私は自分の立場に戸惑いを覚えながらもかく言語調査の打ち合わせをして帰路についた。

その後ウボンにはもう1度行ったが、ローイの方にはまだ行ってない。ウボンで知り合った青年がカナダ行きを希望してバンコクで待機している。バンコクの中継センターはいずれも満員なのであとから来た人々はホテルやゲストハウスにつめ込まれる。彼はいよいよとなるとやはり祖国が忘れられない、家族さえなければ戻って反攻ゲリラに加わりたい、という。同じホテルにローイからメオ族の一団が到着した。山頂を好むからでもあるまいが、ホテルの屋上に泊められた。そこでアメリカ行きを待つという。このちぐはぐさがこの人々の将来を暗示しているように思えてならない。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)